

新井さん(桐生市出身)詩集「ベットと織機」

桐生市出身の詩人、新井高子さん(47)が織機りの女性を描いた詩集「ベットと織機」(未知谷)を刊行した。織物工場で育った体験をベースに、生産現場の熱気や働く女性のたくましさ表現。生活感あふれる上州弁を「文学言語」として詩に取り入れるなど、新たな創作スタイルにも挑戦している。

家業とつながり

新井さんは、桐生市内の老舗の機屋で育った。「詩を書くことと家業の織物業は、ものづくりというルーツでつながっている」と強調。表題作の「ベットと織機」は、織物工場からイメージを膨らませ、織機りの女性の力強さを描いている。

「(前略)泣きじゃくれば、飲まサアなんねエ/赤ンぼオブって、通っておったんです、女工さんらは/ベビーベットさ持ち込んで、稼エでおったんです/機械油と髪油と乳臭さが、工場のおい(後略)」
若い機織り女性の悲哀をえた方言調の言葉で、生産

工場の熱気、女性のたくましさ

上州弁で生き生きと



「方言の響きを取り入れることで、新しい詩の文体を見つけたい」と語る新井さん

あらい・たかこ 1966年桐生市境野町生まれ。慶応大大学院修了。詩集「タマシイ・ダンス」で2008年に小熊秀雄賞受賞。東京都内で、詩人ら6人でつくる詩と批評の雑誌「ミテ」の編集・運営に携わる。

機屋の娘として育った母親をテーマに、方言を取り入れた詩作に挑戦した。上州弁独特の響きや言葉遣いに「文学言語」としての可能性を感じ、「ベットと織機」ではそのリズムを本格的に取り入れた。

方言が消え、標準化が進む日本語の現状を「言葉が本来持っている豊かさが失われつつある」と受け止める。その上で、字数や季語といった決まりがない詩

は、方言のような話し言葉を取り入れて新しい文体を作る余地があると考えている。

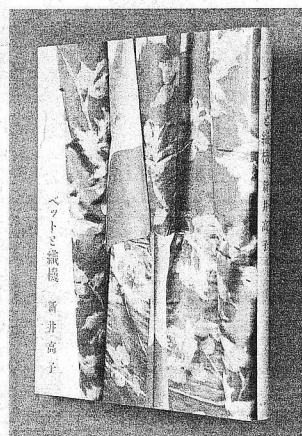
方言の可能性

2007年に刊行した詩集「タマシイ・ダンス」の中の「wheels」で、

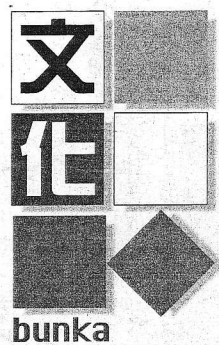
閉塞感に風穴

東日本大震災後の原発問題をテーマにした作品も収録した。「機屋の機械も電気で動いており、エネルギー問題は機屋で育った私自身の問題でもある。桐生という町を描くには、無視できない

テーマの一つだった」と振り返る。「言葉や原発の問題に限らず、社会全体がコントロールされているという閉塞感がある。たとえ小さくても、詩の世界からそこに風穴を開けたい」と決意を語った。



「ベットと織機」



故郷にて思うこと

に、気持ちがわくわくしてきます。苦手なことを克服したり、できないことをできるようになる努力はもろろんとても大切ですが、いま持っている自分の長所を生かして考えていくと、可能性の広がり方が2倍にも3倍にもなって楽しくなっていくのです。

たとえば、手が小さい人がピアノを弾くのは、手の大きい人よりも不便なことが多いのです。でも、その手の小ささが生き生きする曲を選んで弾けば、それはその人の魅力になります。大切なのは、自分は何が得意かを見極めることでしょう。ではどうやって得意なものを見つけられることができるのでしょうか。わ

らしさが心惹き付



山中千尋さんのコラム、フロン・東国浪漫」のバックナンバー、読みます。

